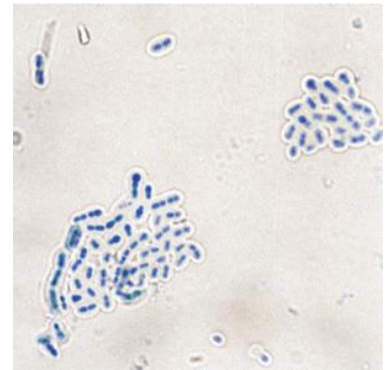


侵襲性肺炎球菌感染症 (invasive pneumococcal disease: IPD) とは

1 侵襲性肺炎球菌感染症について

侵襲性肺炎球菌感染症とは、肺炎球菌による侵襲性感染症（本来無菌的な部位から起因菌が分離された感染症、一般的に重症例が多い）のうち、血液又は髄液等からこの菌が検出された病態のことです。小児および高齢者において、菌血症を伴う肺炎、敗血症、髄膜炎などを引き起こすため、注意が必要です。



肺炎球菌

(国立感染症研究所 HP より)

2 原因と感染経路

この感染症は、肺炎球菌によって引き起こされます。肺炎球菌は、ヒトの上気道(鼻やのどの奥)に定着することもある常在菌の一つで、中耳炎や肺炎の原因菌となることがあります。感染経路は、患者の咳やくしゃみなどのこの菌を含むしぶきによる飛沫感染や接触感染です。保菌者や感染者が必ず発症するわけではありませんが、免疫力が低下している場合や粘膜バリアの損傷等により菌が体内に侵入することによって発症します。

3 症状

潜伏期間は不明ですが、小児及び高齢者を中心とした発症が多く、小児と成人でその臨床的特徴が異なります。

小児

成人と異なり、肺炎を伴わず、発熱のみを初期症状とした菌血症例が多いとされています。また、髄膜炎は、直接発症するものの他に、肺炎球菌性の中耳炎に続いて発症することがあります。

成人

発熱、咳、喀痰、息切れを初期症状とした菌血症を伴う肺炎が多く、髄膜炎例では、頭痛、発熱、けいれん、意識障害等の症状を示します。

4 検査方法

血液や髄液等から肺炎球菌を分離培養する方法やPCR法を用いて肺炎球菌の遺伝子を検出する方法があります。また、髄液からラテックス法やイムノクロマト法により病原体抗原を検出する方法もあります。

5 予防のポイント

侵襲性肺炎球菌感染症の予防にはワクチンの接種が有効です。現在、高齢者や小児を対象に定期接種化されています。肺炎球菌ワクチンには、主に高齢者を対象とする 23 価肺炎球菌莢膜多糖体ワクチンと、小児と高齢者を対象とする 13 価肺炎球菌結合型ワクチンがあります。

6 リンク先

国立感染症研究所

<http://www.nih.go.jp/niid/ja/id/1150-diseases-based/a/haemophilus-influenza/idsc/iasr-topic/5045-tpc416-j.html>